村上春樹

『タクシーに乗った吸血鬼』

レポート集

（第8回読書会）2月19日（土）13：45～「タクシーに乗った吸血鬼」第１回討論

（第9回読書会）3月19日（土）13：45～～「タクシーに乗った吸血鬼」第2回討論

4月16日（土）「タクシーに乗った吸血鬼」レポート締切。後、西田読書会HPに掲載

（第10回読書会）4月23日（土）13：45～～「タクシーに乗った吸血鬼」第3回討論

「悪い事」とは何なのか？

田中　克典

　主人公「僕」（以下、「僕」と表記）にとって、「悪い事」（と思える事）ばかり続いた日の夜の出来事をつづった物語。「悪い事」の究極が、渋滞のタクシーに乗り込んだことだった。

　それまでに起こっていた「悪い事」の連続～待ち合わせた彼女とすれ違う、上着のボタンが取れる、電車の中での嫌な出会い、虫歯、雨降り～

　「悪い事は往々にして重なる」という一般論も、自分の中で自分を慰める言葉だけだったら自分を納得させられるが、他人から言われると腹が立つ。

　そんな僕は、雨の中乗車したタクシーが、渋滞に巻き込まれ、まさにタクシーに閉じ込められてしまう。タクシーは進まない、料金メーターは上がる、加えて、禁煙３日目のストレス。悪い事は重なっていく。仕方なく、（自分にとって）良いことを考えようと思い、頭の中で彼女の服を脱がせていく。

　そんな僕に運転手からの問いかけ、「吸血鬼を信じますか？」

　最初は、馬鹿げたことを云う最悪の運転手に出会ったと思ったが、会話が進むうちに少しずつ変わっていく。

運転手は９年ほど前、ミュンヘンオリンピックの年（１９７２年）ころから吸血鬼になった、という。正確に言えば、「なった」と信じ込んだのだ。山があると思えば山がある、運転手が吸血鬼だと思えば運転手は吸血鬼なのだ。

だから運転手は夜に働くようになった。ただ、吸血鬼の概念にはとらわれたくなくてタクシー運転手になった。

吸血鬼だから、血を吸う。それも、男より女がいい、酒、タバコを多くたしなむ人はダメ、岸本加世子、真行寺君枝はいいが、桃井かおりはダメ。でもそれらを吸血鬼の一般化にはしない。吸血鬼だからって血を吸うばかりではない。運転手もまだ、本当に血を吸うたことはない。（僕との別れ際のつぶやき「いつか本当に吸えればいいんだけどな」。）「血を吸うこと」について信じ込んでいるだけなのだ。

運転手は、「信じ込む」ことを「実証」と、思い込んでいる。それは、主観と客観の混同でおかしいことだが、それはそれでいいのだ。山があると思えば山があるのだから。

僕と運転手の間にあるのは、言葉とバックミラー。これらを媒介にして、僕と運転手の間の距離は複雑に動いていく。言葉は、二人の距離を縮めていく。当初は運転手の言葉を馬鹿げたものと受け流しながら、徐々に運転手からの言葉の世界に入り込み、「吸血鬼だという運転手の言葉」（運転手の信じ込みを）を信じ込むようになる。しかし、運転手を吸血鬼だと信じ込んだわけではない。そのことで、バックミラーは二人の距離を遠ざけていく。僕は、吸血鬼だという運転手の言葉の世界に入り込んでいくが、バックミラーは、吸血鬼だという運転手を映さなくなる。映せば、運転手の言葉の世界から出て行ってしまうことになるから。

悪い事は往々にして重なるという一般論。しかし、「悪い事」なんて、それが「悪い事」だと信じ込むから「悪い事」なのだ。山があると思えば山があるのだ。「悪い事ではない」と思えば、「悪い事ではない」のだ。このことを彼女に伝えたい。

僕は、タクシーを降り、帰宅し、すれ違って会えなかった彼女に電話する。そこで、彼女からすれ違いの理由を確認する。「すれ違い」は、二人にとって、あながち、「悪い事」ではなかった。僕が「悪い事」だと思い込んでいただけなのだ。

僕は、彼女に吸血鬼の乗ったタクシーの存在を知らせ、当分の間の乗車回避を進言する。注意を喚起する。運転手の信じ込みも「当分の間」だと考えているのだ。それが、何が起こるかわからないこの巨大な街の実態なのだ。

山があると思えば山がある、山がないと思えば、山はない。人の心に、いつどんな山が顕れるのか、それは誰にも分からない。でも、いつか、山が顕れることだけは確かなのだ。その時、どう考えたらいいのか、このことをこの小説は私たちに教えてくれている。

以上

信念と実在

佐野之人

**はじめに**

「でもね、本当に吸血鬼がいたらどうします？」

　「参っちゃうだろうね」

　「それだけですか？」

　「いけないかな？」

　「いけないですよ。信念というものはもっと崇高なもんです。山があると思えば山がある、山がないと思えば山はない」

　なんだかドノヴァンの古い唄みたいだ。

何故「信念」が崇高なのか。「山があると思えば山がある、山がないと思えば山はない」は信念と実在の一致を言っているように思われるが、これが何故「崇高」なのか。この言葉の持つ崇高な意味を手引きとして、この作品が最終的に何を目論んでいたのかを明らかにしてみたい。

　「ドノヴァンの古い唄」についてウィキペディアに以下のような解説がある。

「霧のマウンテン」（原題：There Is a Mountain）は、[ドノヴァン](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%89%E3%83%8E%E3%83%B4%E3%82%A1%E3%83%B3)が作詞作曲し、1967年に発表した楽曲。「First there is a mountain, then there is no mountain, then there is.」という歌詞は、[禅](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E7%A6%85)ならびに仏教の思想を欧米諸国に最初に紹介した書物の一つと言われている[鈴木大拙](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E9%88%B4%E6%9C%A8%E5%A4%A7%E6%8B%99)の『Essays in Zen Buddhism: First Series』（1927年）からとられた。鈴木は次のように述べた（原文は英語）。(訳)青原惟信によれば、「人が禅を学ぶ前には、かれにとって山は山であり、川は川であった。よき師の指導によって禅の真理を洞見しえたのちには、かれには山は山でなく、また川は川でなかった。しかしやがて、かれが本当のやすらぎの境地に至った時には、山はふたたび山であり、川はふたたび川であった」。

「山があると思えば山がある、山がないと思えば山はない」というのと鈴木の上の文はどのように関わるのであろうか。我々は信念を実在として生活している。そのことに何の疑いもなければ自覚もない。これが我々の〈日常性〉である。何らかの経験をもとに山という言葉を得、山を川から区別して（分別）、そこに山があると思っている（信念）通りに山がある（実在）と思っている。これが我々の〈日常性〉における「山があると思えば山がある、山がないと思えば山はない」の意味である。これは「禅を学ぶ前」の理解（山は山である）であり、なお「崇高」とは言えない。

　この「信念」は言葉による分別であるが、小説冒頭に出てくる「一般論」とは異なる。この一般論は自分という特殊を含まない一般であり、事実として起こっている出来事から抽象された理論である。「インテリ」が「口からでまかせ」に述べることのできる類のものである。ここでの「信念」はそうした単なる〈観念〉や理屈ではない。生きる上で不可欠なもの、それなしには実地の行為が成り立たない、そうしたものである。

　また「山があると思えば山がある、山がないと思えば山はない」は、「万物の尺度は人間である、有るものについては有るということの、無いものについては無いということの」と述べたプロタゴラスの説を思わせるが、それが、ある人にとって〈酒が旨く有ると思われ〉ればその通りに〈旨く有る〉というような、〈人それぞれ、その時々〉の真理の相対主義を導くものであるならば、そうした説とも異なる。この「信念」は当人にとってどうでもいいような事柄については〈人それぞれ、その時々〉を認めるであろうが、どうでもよくない事柄については〈今〉〈ここ〉での信念が絶対に正しいと主張されるような信念である。この正しさが認識については〈真理〉とされ、実践については〈善〉とされるのである。人間は根本的なところで自分が絶対的な正義であるという信念を決して手放さない。自分が間違っていたと信ずる場合でも、そう信じている自分は正しい。一般的にはどんなに悪いことでも〈今〉〈ここ〉ではそうしても善いと思っているからそうするのである。これが第一段階。

　第二段階では、この信念が信念として自覚される。信念が信念にすぎず、実在ではないことが自覚される（山は山ならず）。そうして人間は信念の中でしか生きることができないことが自覚される。これが「山があると思えば山がある、山がないと思えば山はない」の第二の理解である。信念が実在ではなく、人間が信念の内に閉じられていることの自覚が、実在へと超越し実在に触れる機縁となる。山が山でないことによって山となる、この関係を鈴木は「即非の論理」と呼び、西田幾多郎は「逆対応」と呼んだ。これが「よき師の指導によって禅の真理を洞見しえた」第二段階である。しかしこれでもなお至極はしない。鈴木は第一の段階を「分別」、第二の段階を「無分別」と呼ぶが、その先に第三の段階がある。

　第二段階では信念が真に信念（信念は実在ではなく信念に過ぎない）となることによって、実在が実在となる、ということになった。信念が信念であることが明らかになることによって実在が実在として自らを顕わにする。これが、信念（山があると思えば）がそのまま実在（山がある）ということであり、「山があると思えば山がある、山がないと思えば山はない」の第三の「崇高」な意味、すなわち「本当の安らぎの境地に至る」ことである。これを煩悩即菩提と呼んでもよい。鈴木はこの第三段階を「無分別の分別」と呼び、西田はこれを「平常底」と呼んだ。この三段階を「色即是空、空即是色」における色、空、色の三段階と見てもよいだろう

1. この作品における「信念」の層

　次にこの作品における「信念」の層について述べておきたい。まず「運転手」は吸血鬼の存在を信じている。自分が吸血鬼だからである。自分が吸血鬼であることを事実として受け入れている。それ故これは「事実」であって、もはや「信念」とは呼べないのかもしれないが、「山があると思えば山がある」という論理に従えば、自分が吸血鬼であることも「信念」である。そうしてこうした「信念」が形成されたのは「ミュンヘン・オリンピックの年」ということになる。おそらく彼はその年に何らかの機によって言葉以前の実在に触れ、「私がそれ（＝吸血鬼）だ」というような体験をしたのであろう。これが第一の層である。

　第二の層は、仮に「僕」が、運転手が吸血鬼であることを信じるに至ったとして、そうした「僕」の「信念」である。こうした「信念」が形成されるのにも何らかの機によって言葉以前の実在に触れることが必要である。

　第三の層は「読者」の層である。まず「僕」が〈運転手が吸血鬼である〉ことを信じているとしてこの小説を読んでいるか、信じていないとしてこの小説を読んでいるかが問題となる。もし信じているとして読んでいれば、それが読者の信念となる。信じていないとして読んでいれば、それも一つの「信念」である。さらに、仮に読者が「運転手が吸血鬼である」ことを信じるに至ったとするならば、それもひとつの「信念」であり、信じないというのも「信念」である。いずれの場合も読者は読むことを機縁としてそうした信念に至ったのである。

　語り手は「僕」の「信念」がどのように形成されたかを描くことで、信念を信念として顕わにする。それと同時に読者において形成された信念にも注意を向けさせ、それが信念であることを自覚させなければならない。ここでは読者が一定の解釈（信念）を導き出すことが目的ではありえない。そのようにして形成された解釈（信念）がまさに信念であることに目覚めさせること、このことが語り手の最終的な目論見である。その意味で語り手は〈それはお前の信念ではないのか〉と厳しく問いかける。それを通じてのみ、読者は「信念」の「崇高」な意味に到達し、実在に触れうるからである。

　ところで読者の信念（解釈）が信念であることに目覚めさせるには、導き出した如何なる解釈をも疑わせるような語り方が必要である。そもそも解釈（信念）以前の実在には如何なる解釈の線も引くことはできない。それ故あらゆる解釈の線を疑わせるような語り方が選ばれなくてはならない。

　文庫版では必ずしも読者に、「僕」が吸血鬼の存在を信じている、と思わせるような語りになっていないし、読者に吸血鬼の存在を信じさせるような語りにもなっていない。ちょっと吸血鬼の存在を「僕」が信じたような気になった、あるいはそんなふりをしてみせたという解釈に導くきらいがあった。そこで全作品版では一方で「僕」が吸血鬼の存在を信じるようになった、という解釈を強く導くような加筆を行うと同時に、他方でそれを疑わせるような加筆をも行っている。それによって読者に一定の解釈を出させずに（一定の信念に安住させずに）、自らの出した解釈（抱いた信念）そのものに注意を向けるような語りを選んでいると言える。以下、具体的に述べる。

1. 改訂はどのように行われているか

　小説は「悪いことというのは往々にして重なるものである」という「一般論」から始まる。「しかしもし実際に幾つか悪いことが重なってしまえば、これはもう一般論なんかじゃない」と「僕」は言う。確かに実際に起これば、理論ではなく、事実だし、それは「一般」的な話ではなく自分事である。だからそんな折に一般論を言う者がいたら「殴り倒してしまうに違いない」のである。

　その直後に文庫版では「あなただってきっとそうだろう」という言葉が続く。「僕」が読者に語り掛ける言葉だが全作品版では削除されている。文庫版ではこの語句の存在によって〈語り手＝僕〉であることが明確になるのだが、全作品版でそれが削除されたのは〈語り手＝僕〉の否定であり、読者に語り掛けていた者が背後に退き、ここでは単にタクシーの中で「僕」がどのように考えたか、感じたかだけを淡々と述べるものとなっている。そうした背後の「語り手」の語りが取りも直さず読者に「お前はこれをどのように受け取るか」という問いかけになっているのである。このように語り手が背後に退くという点では、文庫版で「時々考える」となっていたのが「僕はそのタクシーの中で思った」に改められている点も注目に値する。

そうして全作品版では「一般論とか格言というのはときどき僕をひどく苛立たせる」と「一般論」について「僕」がどのように感じているかを明らかにしている。ここで読者は「僕」が自分の身に実際に降りかかっている「一般論」に苦しめられていることを理解する。その上で続く「とにかく僕は渋滞した道路上でタクシーの車内にとじこめられていた。秋の雨が屋根のうえでパタパタという音を立てていた。メーターが上がる時のカシャッという音が、ラッパ銃から発射された散弾みたいに僕の脳味噌に突きささる。やれやれ」を読むならば、読者は「僕」が「一般論」的思考に支配されていることを容易に理解することができるであろう。「僕」が所謂「一般論」を拒否しながら、実際にわが身に降りかかる「一般論」に支配されているという点の指摘は、「僕」が吸血鬼の存在を信じるに至るとするプロセスの上で重要な役割を担う。

次に大きな改訂が施されているのは、運転手が吸血鬼の存在を信じるといったのに対し、「僕」がそれを「実証できる」かどうかを尋ねた際に、運転手が「信念と実証とは無関係です」と答え、「僕」が「そういえばそうだな」と応じた後の部分である。文庫版では「僕」はすぐにあきらめて「女の子のブラウスのボタン」を外すという妄想に戻るのだが、全作品版では以下の文章が挟まる。

運転手はそれからしばらくのあいだ黙り込んでいた。僕は耳たぶを掻いた。そして運転手との会話をもう一度思い出してみた。吸血鬼？と僕は思った。どうしてこんなところで吸血鬼の話をしなくちゃいけないのだ？あるいはこの話には何かおちがあるのかもしれない。でも運転手は口を閉ざしたままだった。

この文章が挟まることで、僕はこの運転手の話を「おち」のある冗談と受け取っている可能性が示されている。渋滞に巻き込まれたタクシーの運転手が、イライラして時間を持て余している客のためにサービスに冗談で楽しませるということは常識的に考えやすい。この文章を読んだ読者は爾後のやり取りをも、「僕」が冗談の可能性を考えて行っており、もしかすると実際になされた会話も、軽く運転手の冗談に乗ってその気になっているだけだ、との可能性を頭の片隅に置いて読むことになる。「僕」が吸血鬼の存在を疑っているという方向に読者を導くベクトルを持つ改訂である。当然こうした文章をここに挟む必然性が問われる。

　次に大きな加筆が施されたのは、「僕」が運転手に「どうしてタクシーの運転手をやってるの？」と尋ねた際に答えた運転手の第一の理由である。「昼間が苦手」「いろんな人に会える」というのは「僕」および読者に運転手が吸血鬼であると信じさせるにプラスに働く効果を持っている。それよりも決定的であるのは運転手の「お客さん、信じてませんね？」と「私が吸血鬼だって……信じてないでしょう？」の間に挟まれた以下の文章である。

僕は顔を上げてミラーの中の運転手の顔を見た。しかしミラーは妙に暗くて、彼の顔を見ることができなかった。僕は目をこらしてみたが、そこには顔の輪郭らしきものがぼんやりと浮かんでいるだけだった。おかしいな、と僕は思った。さっきまではちゃんと見えていたのにな。

文庫本では間には「ん？」とあるのみである。この文章が挟まることで読者は、この運転手が本当に吸血鬼だと信じるに至るかもしれない。あるいは少なくとも「僕」が、運転手が吸血鬼であることを信じるに至る必然性を認めるかもしれない。そうしてその直後の「「もちろん信じてるよ」とあわてて僕は言った。「山があると思えば、山はある」」という叙述を「僕」の本心であると解釈するかもしれない。しかし運転手の話を冗談かもしれないと疑っている読者の目には、運転手の迫真の演技で「僕」がそんな気になっているかもしれないという疑念は拭えないし、「あわてて」とあるように「僕」も運転手の迫力に押されて、ついそのように言わされた、そうして爾後の会話もそれを前提にせざるを得なくなった、とも受け取れるだろう。そうだとしても、この箇所の加筆は運転手が吸血鬼であることを信じさせるようなベクトルを持ったものであることは間違いない。

　次に大きな加筆が行われているのは、運転手から酒と煙草をやりすぎて血がまずいと言われた時の「僕」の反応である。その中に「僕は頷いた。そうかもしれない」という言葉がある。もちろんこれは上記と同じベクトルを持つ加筆である。

　ところがその後、全作品版では運転手は妙なことを口走る。「美味い」血と聞かれて、女優でいうと美味いのは誰それ、気が進まないのは誰それと答えた後、「これはまああくまで個人的な好みですけどね。一般化はできないだろうな。みんなが血を吸うわけじゃないから」と言っている。「みんな」とは誰のことだろう。文脈から言えば吸血鬼仲間ということになるだろうが、そうであれば血を吸わない吸血鬼が存在することになる。しかしそれはおかしいだろう。その他に考えらえられるのは「人間」である。そうだとすると、この運転手は女優の「美味さ」を聞かれて「血を吸う」ことも含めた一般的な意味で答えたことになる。当然「血を吸う」ということの意味が問われる。必然吸血鬼であることの意味も問われるだろう。「僕」はそんなことは一向に問題にせずに「うまく吸えるといいね」などと、適当な受け答えをしている。読者は「僕」が、運転手の奇妙な物言いに気付いていないのか、気づいていてどうでもいいから適当に返事をしたのか、全く分からないままに置かれる。「うまく吸えるといいね」は両版に見られる表現であるが、全作品版での運転手の不可解な発言が加筆されることで、読者はこの表現をどう解釈していいか大いに迷うことになる。加筆自体はもちろん運転手が吸血鬼であることを疑わせる方向に読者を導くものだ。

　さらに文庫版での運転手の最後の言葉「そうですね」の後に加筆がなされていて、それが運転手の「いつか本当に吸えるといいだけどな」というセリフである。文脈から言えば美味い女優の血を本当に吸えるといいのだが、という意味である。しかしその直前の奇妙な言葉に接している読者は、この運転手はもしかすると本当に血を吸ったことがないのではないか、という疑念を持つだろう。わざわざこんな加筆を行った必然性が当然問題になる。

　最後の大きな加筆は、家に帰り、彼女に電話をして吸血鬼の乗ったタクシーには乗らないように注意した際に、彼女に「しんじてくれないかもしれないけれど」と言い、さらに「僕」が心の中で語った言葉である。

でもそれは本当なのだ。そのタクシーには運転手の恰好をした吸血鬼が乗っているのだ。そしてなんといっても、彼女はそれに注意しなくてはいけないのだ。この巨大な街ではどんなことだって起こりうるのだ。山があると思えば、そこに山はあるのだ。

この加筆によって少なくとも字面の上では、「僕」は例の運転手が吸血鬼であることを信じている、と読者は考えなくてはならないことになる。もしかするとこの加筆によって読者も吸血鬼の存在を信じるに至るかもしれない。この加筆はそうしたベクトルを持つ加筆である。しかしそれと同時に、ここまで疑念を抱きながら読んできた読者には、「僕」が「吸血鬼」というのをどういう意味で用いているのかという疑いも起こって来る。あるいは「僕」はこの内面の言葉を本気で言っているのか、それとももしかすると、彼女を怖がらせようとしたが彼女の反応が冷たいので言い出せずに内面の言葉になったのか、そうした疑念すら拭えない。

　こうして改稿の実際を調べてみると、吸血鬼の存在を信じさせる方向と、疑わせる方向の両方面で改稿が行われていることが分かる。

1. この小説の読み筋

この小説は、この運転手が吸血鬼であるということを「僕」が信じたという線で一貫して読むことができる。その場合、どのようにして「僕」がそれを信じるに至るかというプロセスの必然性が関心の的となる。それを追ってみよう。

小説は「悪いことというのは往々にして重なるものである」という「一般論」（信念）からいきなり始まる。この言葉が発せられる前に、そのような言葉が出てくるような機縁（状態）があり（それが「待ち合わせていた女の子とはすれ違う」等である）、それがこうした言葉によって理解されることになる。しかしこのように一般論を意識し言葉にすることで、人間は爾後それに囚われることになる。「僕」は所謂一般論を激しく嫌うが、それはその一般論が現実にわが身を捉えていると感じているからに他ならない。タクシー内の「僕」は完全に「一般論」的思考に支配されている。渋滞に巻き込まれたことも、雨の音も、タクシーのメーターが上がる音も「僕」をイラつかせる。しかも禁煙三日目で煙草が吸いたくて仕方がない、というのもすべて「一般論」の地平で語られている。楽しいことなど思いつかないので、女の子の服を脱がす順序を考えるなどというような、楽しそうで刺激的ではあるが、しようもないことを考えている、逆に言えばそれほど追い詰められている、そんな折にタクシーの運転手に吸血鬼の存在を信じているかと尋ねられる。

吸血鬼や幽霊の存在を信じるか信じないかのやり取りに「僕」は面白がって付き合う。「僕」は幽霊の存在は信じるが、吸血鬼の存在は信じない、ということを根拠を以て一般的に論じた。しかし運転手は吸血鬼の存在を信じていると言う。実証できるかと問えば、「信念と実証とは無関係だ」と言う。その後運転手が黙っているので、ふと我に返り、何でこんな話をしているのか、この話には何かおちがあるのかもしれないなどと考える。「耳たぶを掻く」など、イライラしている。運転手は黙ったままなので、仕方なく「僕」は女の子のブラウスのボタンに戻る。ずいぶん経ってから運転手が「実証できる」と言う。「どんな風に？」と問うと、「私が吸血鬼だから」と言う。

車がさっきから５メートルしか進んでいないこと、雨が相変わらずパタパタと音を立てていること、メーターが千五百円を超えていることなどに意識が向いている。「一般論」だ。「悪いことがまた重なった」という意識が起こっている。たまらず運転手にライターを借りて煙草を吸う。

この場合「悪いこと」とは何だろう。常識的に考えるならば、つまらない冗談にこれ以上付き合わされることだろう。だとすれば無視するか、この話を打ち切りにするか、あるいはぎゅうぎゅうにとっちめて吸血鬼ではないことを白状させるかして、このつまらない冗談を止めさせることだろう。しかしその後の「僕」と運転手の会話を見ても、追及は極めて甘い。むしろ半ば運転手が吸血鬼であることを信じているかのようである。あるいはあきらめてこの冗談に付き合わなければならないという覚悟を決めたのかもしれない。しかしここは「僕」が、運転手が吸血鬼であることを信じるに至るという線で解釈を続けていこう。そうだとするならば、何故「僕」がたやすく運転手の「実証」を信じたかが問題となる。

それまでは「僕」は吸血鬼と幽霊の存在について「一般論」による議論を繰り広げていた。「実証」という言葉もそうした一般論を裏付けるものとして理解していた。ところが運転手は「信念の崇高さ」を語り、自分事として「実証」を語る。この落差。所謂一般論に激しく憤り、それだからこそわが身に降りかかる事実としての「一般論」に取りつかれていた「僕」はこの落差に少なからず驚くと共に、この運転手にとっての凶事を抵抗なく受け入れ、そうした凶事に自分も預かっていると感じたのではないだろうか。先程の「悪いこと」とは運転手の身に起こった出来事を自分事として感じたということになる。

この運転手もミュンヘン・オリンピックの年に「吸血鬼とは私のことだ」というような言葉を発せしめる体験をしている。それは吸血鬼の一般概念を破るような仕方で、他人事の吸血鬼ではなく、わが身の事柄として体験したはずだ。それに言葉を与えることでこの運転手は「吸血鬼」になった。「僕」が運転手から「実証」として「だって私が吸血鬼だから」という言葉を聞いた時に、それまで一般論とその実証という宙に浮いた議論から、実在に触れる体験の場に引き戻されたのではないか。それが機縁となってこの運転手の「実証」を受け入れてしまったのではないか。信念が機縁（状況）の中で形成されつつある。

この「実証」は所謂科学的な実証とは根本的に異なっている。吸血鬼であることを科学的に実証しようとすれば、吸血鬼の定義が必要である。しかしそれは「運転手」が否定する吸血鬼の一般概念に則るほかはないであろう。したがってここでは科学的な実証は不可能である。

さて「吸血鬼という概念に捉われたくない」と言って、普通の人間のような生活をしている吸血鬼である運転手を「僕」はなおも「ピンと来ない」と半信半疑でいた所を、「お客さん、信じてませんね？」と自らの心の内を半ば言い当てられて、「僕」は少なからずドキッとしたはずだ。そうして顔を上げてミラーの中の運転手の顔を見ると、さっきまでちゃんと見えていた顔がはっきり見えない、という怪が起こる。こうした怪奇も半ば運転手が吸血鬼かもしれないという思いがそのように見えさせたのかもしれない。そんな折にダメを押すように、「私が吸血鬼だって・・・信じてないでしょう？」という運転手の声。不意を突かれて思わず「もちろん信じてるよ」と「僕」は「あわてて」言ってしまう。しかも先に運転手が「信念」について語った折に出てきた「山があると思えば、山はある」という言葉を、ドノヴァンの古い唄と連想づけて記憶していたために、ついでに思わず「山があると思えば、山はある」と口走ってしまう。

「僕」は自らの状況に対し「悪いことは重なる」という「一般論」を口にすることで、それを「信じ」それに支配された。その支配の中で、吸血鬼としての運転手と出会い（体験）、その存在を信じ、それを「山があると思えば、山がある」というように「一般論」にした。体験に言葉を与えることによって、その言葉は信念となり、存在となる。すでに「悪いことは重なる」という「一般論」において経験されていたことが、その本質において「山があると思えば、山はある」、すなわち〈信念が実在を生む〉というように捉え直されたのである。

さらに運転手との会話の中で「僕」は、普通の人間の生活をしている者が吸血鬼であることを「別におかしくない」と感じ、さらに女の子の血を吸うことに充実感を覚えるという運転手の話に「分かるような気がする」と吸血鬼に対する共感度を増していく。

先に改稿された部分を検討した際に、運転手が妙なことを口走っていることを確認した。本当に血を吸っているかどうかも疑わしい、と言う疑念も生じていた。しかし「山があると思えば、山はある」という理論に従えば、本人が本当に血を吸っていると信じているのであれば、本当に血を吸っているのである。そうしてその気持ちが分かるということは、「僕」も吸血鬼の部分を有するということに他ならない。

帰宅後「僕」は彼女に電話をする。今日彼女とすれ違った理由が分かる。「僕」は「そういうものなのだ」と言っている。この言葉は小説冒頭の「一般論なんて結局はそういうものだ」を読者に想起させる。〈理由があればどんなことだって起こる〉、これももちろん一般論だ。しかしこれは「悪いことは重なる」という一般論を超克している。

彼女との電話の中で「僕」は吸血鬼の運転手が乗ったタクシーには乗らないように、と彼女に注意を促す。「しんじてくれないかもしれないけれど」と言った後で、心の中で「それは本当なのだ。…彼女はそれに注意しなければいけないのだ」と言う。そう言い得たのは「僕」自身が部分的にせよ、吸血鬼だからであり、それが自分事だからである。

さらに「この巨大な街ではどんなことだって起こりうるのだ。山があると思えば、そこに山はあるのだ」と心の中で言う。先の〈理由があればどんなことだって起こる〉という一般論と「山があると思えば、山はある」という一般論が合体した形だ。しかもその一般論は所謂一般論ではもちろんない。体験を通した信念として語られていると考えられる。〈どんな機縁か前もっては分からないが、しかるべき理由があれば何らかの機縁に従って信念が形成され、それが実在となる〉、こうした内容の一般論（信念）がタクシーに乗った運転手とのやり取りを機縁として「僕」の中に形成されたことになる。

問題はこの一般論が十分に自覚されているか否かである。十分に自覚されている場合、第一にこの一般論は他人事の理屈ではなく、自分事の事実であり、自らが生きる上でなくてはならない信念として自覚されていることになる。第二に、こうした信念がどのように成立するかを知ることによって、一般論に支配されることなく、それから解放され自由になるだろう。第三に、そもそもこの一般論自体が「信念」に過ぎないということが自覚されており、これを「実在」と思い謝ることはない。しかしそれだからこそ、そのことに十分に自覚的である時には逆に「信念」（言葉）以前の真の「実在」に何らか触れている、と言えるだろう。信念と実在が即非的に、あるいは逆対応的に同一となる。こうして「山があると思えば山がある」が十全に理解されたことになる。

さて「しばしの沈黙」の後、彼女は「どうもありがとう」と言う。彼女が「僕」の言葉を信じたとは到底思えない。小説はそのまま終わるが、読者は「僕」と彼女の間で交わされる次なる会話を当然想像するはずだ。そうしてその会話はおそらくちょうど、タクシーの中の運転手と「僕」の間に交わされたようなものになるだろう。「僕が吸血鬼だからさ」。

これが一つの読み筋である。「僕」は体験に言葉を与え、それが信念となり、それが存在となった。そのプロセスの中で「一般論」は「悪いことは重なる」から、信念が存在となる、すなわち「山があると思えば、山はある」へと、さらに「どんなことだって起こりうる」という信念と存在との完全なる同一性へと昇華して行った。

しかしこうした読者の読み筋自体が一つの解釈であり、信念に過ぎない。このことに十分に自覚的でなければならない。読者は自分が解釈した「僕」と共に吸血鬼の存在を信じたのである。こうした信念の形成の機縁となったものが小説を読むことの内にあったはずである。読むということはテキストと読者の間の対話であるから、そうした機縁がどこにあるかを客観的に示すことはできない。「僕」の身に悪いことが重なり、「僕」が一般論を憎みながらもそれに支配されていたからこそ、それが運転手の「私が吸血鬼だから」という言葉を信じる機縁となったように、読者に一定の解釈をもたらすものも、読者の側の条件から独立ではないからである。こうした条件が異なるに従って、ある読者は吸血鬼の存在を信じるに至るだろうし、ある読者は吸血鬼の存在を信じないという信念に至るだろう。

もう一つの読み筋に従えばどうなるであろうか。そもそも運転手の話は渋滞に巻き込まれて、イライラして時間を持て余している客に対するサービスであり、冗談であると考えて見る。「僕」は自らの抱える前提（「悪いことは重なる」）故に「私が吸血鬼」という運転手の悪い冗談に付き合わざるを得なくなっている。しかし「お客さん、信じてませんね」という運転手の迫力のある物言いに、何となく寒気を覚えミラーが異様に見えた。畳みかけるように「私が吸血鬼だって…信じてないでしょう？」という言葉。「もちろん信じてるよ」と思わず言ってしまう。おまけに連想で「山があると思えば、山はある」という言葉まで口走ってしまう。爾後の会話はそれを前提に進んでいく。運転手の、吸血鬼であることを疑わせるような発言も、軽く聞き流し、「うまく吸えるといいね」と適当なことを言って済ませ、運転手の最後の「いつか本当に吸えるといいんだけどな」という言葉もおそらく聞いていない。要するに「僕」は運転手に対して適当に話を合わせているだけなのである。家に帰っても、吸血鬼に出会ったなら真っ先に彼女に電話して注意するところなのにそうしていない。そうして吸血鬼に用心するようにという注意は「ところで」とあるように、余談になっている。少なくともその会話からは本気で彼女の身を案じているようには見えない。むしろ彼女を怖がらせて楽しむという仕方で、コミュニケーションのネタとして吸血鬼の話を持ち出したようにすら見える。「僕」が吸血鬼の存在を信じていることの決定的な証拠と思われる「僕」の独白「でもそれは本当なのだ」も、彼女を怖がらせるために言おうとしたのだけれども、彼女の冷たい、突き放すような言い方にたじろいで言い出せなかった内容かもしれない。

このように読んだ場合、読者は吸血鬼の存在を信じるという信念には至らない。「僕」と運転手、「僕」と彼女の間の怪談話で済んでしまう。むしろこういう読み筋の方が常識的であるとも思われる。

1. 語り手は何を語ろうとしているのか

　何故この小説は両様に読めるように書かれているのだろうか。両様の解釈の可能性に苦しむ読者はそのように考えるはずだ。改訂も両様の読み方をさらに促す仕方でなされているとなれば、語り手は一体何を読者に語ろうとしているのかが当然問題になる。

　この小説で語り手は、一定の解釈を引き出して、そこに満足して安住しようとしている読者に、本当にその解釈でよいのか、お前は解釈ということを本当にわかっているのか、そのように問いかけているような気がしてならない。自分の出した一定の解釈に満足してそこに安住するということは、「山があると思えば山がある」という命題の最も浅い理解にとどまるということである。

　解釈は言葉でなされる。体験は言葉以前である。解釈が真に説得的であるのは、それが信念の言葉である場合である。そうしてそうした信念がリアリティを持つのは、それが言葉以前の実在に触れるような体験に根差した場合のみである。しかし解釈が一定の方向に向けて説得的であればあるほど、その分実在はそこから脱け去る。実在そのものに一定の方向というものはないからである。信念（解釈）は実在である、という分別から、信念（解釈）は実在ではないという無分別に至らなければならない理由はそこにある。こうして解釈が真に解釈となる時、実在が真に実在となって顕現する（無分別の分別）。一定の解釈は一定の解釈のままに前とは違った実在性を顕すことになる。こうした解釈と体験、あるいは信念と実在の、これまでとは異なった関係の可能性を考えるように、語り手は読者に促しているのかもしれない。

目の前の人が言ってることを信じる条件

Ｔ.Ｔ.

まず、体験談（といっても伝聞ですが）から始めさせていただきます。

今から20年位前、私が勤務医であった頃、別の病院に勤務していた数年上の先輩医師から、次のような不思議な看護師の話を聞きました。

・・・その看護師は、先輩医師と同じ病棟に勤務していた一見「ごく普通の、可愛らしい女の子」であった。ただ、時々予言のようなことを言い、それがよく当たるので驚かされた。特に、患者の死期をよく当てた。どうしてそれが判るのか聞いたところ、霊が見えるから、という答えであった。例えば死期が近づいた患者には所謂「お迎え」が来ているのが見えるので、そうと判る。

彼女の霊視能力に興味を持った先輩医師は、どうやったら見えるようになるのか等、あれこれと聞き出そうとした。しかし彼女にとっては、物心ついてから霊が見えるのが普通であって、見えてしまうとしか説明の仕様がないことだった。子どもの頃「あれは何だろう」と思って霊をじっと眺めていると、その様子に気付いた母親から「霊は自分が見られていることに気付いたら見ている人に寄ってくるから、見ては駄目」と言われ、それ以来なるべく見ないふり、気付かないふりをしてきた。実は彼女の母親も霊視が出来、その一族では霊感は珍しいことではなかった。

あるとき先輩医師が剖検に立ち会った後に病棟に行くと、その看護師に「どこに行ってはったんですか」と訊ねられた。先輩医師が「剖検室」と答えると、「後ろに霊がいます。剖検室からついてきたみたいです。あとで塩を撒いておいたほうがいいです。」と言われた。病院の中でも剖検室は霊の多いところだそうで、彼女は剖検室に入ると気分が悪くなる、とも言っていた。先輩医師は気味が悪くなり、教えられたとおりに塩を撒いた。・・・

「きっとその看護師さん、『ほんまに塩撒いてるわ、面白～い』って物陰から見て笑ってたんじゃないですかね。」と私は茶化しましたが、先輩医師は真面目でした。

「そんな子じゃないって！他にも辻褄の合うことが色々あったんや。俺だけじゃなくて、部長だって信じてたもんね。」

上司である部長は、出張や飲み会などの前に、容体が気になる患者に「お迎え」が来ていないかどうか、その看護師に訊ねていたとのことです。で、部長は先輩医師に対しては、彼女の霊視を「情報の一つとして参考にしている」と言っていたそうです。

若手の医師は、医局に属する限りはその都合で頻繁に転勤があるものでして、当時その先輩医師も私もそういう浮草のような若手医師の一人でありました。先輩医師が転勤した後に、私もまたその病院へ異動となりました。残念ながらその時には件の看護師はおらず、彼女の霊視についてより詳しいインタビューを試みる機会はありませんでした。

本題に戻ります。「タクシーに乗った吸血鬼」を一読したとき私は、上述の看護師の話を思い出しました。幽霊と吸血鬼とでは小説の中では扱いが異なるようですが、また幽霊と霊は違うものなのかもしれませんが、いずれにせよ超常現象という点では同じです。その上で最初に思ったのは「結局人間は、目の前にいる人が言ってることを信じるものなんだな」ということでした。

しかしながら、何でも闇雲に信じるということではなく、根拠薄弱であっても目の前にいる人が言ってることを信じるに至るには、いくつか条件がありそうです。その条件を、小説に即して抽出してみたいと思います。

（読書会では、そもそも主人公の「僕」がタクシー運転手のことを本当に吸血鬼だと信じたのかどうか、という議論がありました。確かに、改定前のバージョンではそのあたりが曖昧だと思いますが、改定後には「でもそれは本当なのだ。そのタクシーには運転手の恰好をした吸血鬼が乗っているのだ」と言ってるわけですから、本当に吸血鬼だと信じた、ということで良いと私は思います。）

（１）超常現象を体現する当の人物と直接会ったこと。

（２）その人物が、話の通じる普通の人間であること。

　運転手は、タクシードライバーとして勤務しており、ちゃんと税金も納め印鑑登録をし、つまり普通の現代人として生活を営んでいる、ということを主張しています。

（３）その人物に、一般論ではない個別の物語があること。その物語は（少なくともある程度は）理解や共感が可能であること。

　運転手との会話により、9年前のミュンヘン・オリンピックの時に吸血鬼になり（「時よ止まれ」とは、運転手がそれ以来不老不死になったという含意もあるのかもしれません）、昼間が苦手になったので夜に働き、ディスコやパチンコで遊び、女優に関して「個人的な好み」がある、といったことが明らかになります。

（４）実際に、超常現象の片鱗に触れること。

　この超常現象とは、決定的証拠でない、「気がする」程度のもので良いです。雨の夜にバックミラーの中がはっきり見えないことがあるのは、超常の力がなくても説明可能でしょう。（１）～（３）のプロセスによってある程度信念が出来上がっていたら、その影響で非超常現象を勝手に超常現象として解釈してしまうこともあり得ます。

（読書会で私は、バックミラーの中の顔が見えなくなったことが、「僕」が運転手を吸血鬼と信じるに至った決定打だった、というようなことを申し上げました。しかし、その後に小説を読み返しまた村上先生にいただいたヒントについてよく考えてみて、やはりこの小説における信念はプロセスで理解すべきと思い直しました。何故なら、バックミラーの件は加筆部分であり、当初作者はそれなしでも物語は成立すると考えていたはずだからです。）

　これらの条件は、霊視看護師を信じた医師達にもあてはまりますが、言うまでもなく根拠としては薄弱であり、まともな実証になっていません。実際に起こったこととしては、「僕」が吸血鬼運転手に会って話を聞いただけなのと同様、医師達も霊視看護師に会って話を聞いただけです。医師達の方が、霊視の証拠らしいものを見聞きする機会は多かったかもしれないのですが、その霊視が通常よく言われる職業上の勘のようなものとは全く異なるという決定的な証拠があったわけではないです。

　小説の中で「信念と実証は無関係です」と運転手は言います。信念とは「吸血鬼の存在を信じること」で、実証とは「吸血鬼の存在を示すこと」でしょうが、この実証ということの曖昧さが、小説の面白さの一つになっているように思います。上述の条件は、超常現象の存在を信じさせるに至るという意味で、不完全ながらも一種の実証として機能した、とは言えそうです。

顧みると超常現象に限らず多くの場合、信念というのはその程度の薄弱な根拠しかもたないものであるように思います。この世の全ての事柄につき一つ一つ確たる根拠を求めることは時間と労力の上で現実的ではないので、信念には言語化できない不確定要素がつきまとうことになります。その信念が啓示によってもたらされたなら、運転手の言うとおり信念は「崇高なもの」になり得ます。しかし小説の進行とともに信念とは結局、目の前にいる人が言ってることを信じるかどうか、という問題に置き換わっていきます。繰り返しになりますが、小説では上記（１）～（４）のプロセスを経て「信じる」の方に転びます。

小説の会話においては、相手にしているのが吸血鬼（かも知れない存在）であるにもかかわらず、徐々に親しみのようなものが立ち現れてくるかのようです。それは条件（３）に挙げたように運転手の個別の物語が開示され、相手のことをタクシー運転手一般ではなく血の通った個別的存在として認識するようになったからではないかと思います。「血の通った」というのは、吸血鬼には不適当な言い回しかもしれません。しかし少なくとも私にとってこの小説で一番印象的であった点は、吸血鬼が実在するという空恐ろしさと、運転手の個別の物語が「僕」と触れ合うことによって放たれる仄かな体温が、さらりと共存しているように感じられることです。作者による修正のほとんどは、読者に超常現象の決定的証拠は与えないままに、「何となく怖い」「何となく温かい」の両面を強化しているように思います。

“山は無い、だから山が有る”

奈原　伸雄

　この年になっても、私は怪談が苦手だ。《幽霊》が恐ろしい。心身の老化は一つひとつ着実に進むのに、霊気の気配を察知した矢先首筋にズンと来る、あの寒けだけは衰えを知らない。タクシーの中であれ、どこであれ、人の話を漫然と聞いていても、それが心霊現象や臨死体験のエピソードであると解ったとき、あるいは、たまたまFMラジオから流れる古典芸能の解説者が物静かに語るストーリーが、怨霊物とか怪異譚であると知れたとき、遅くとも１秒以内には、瞬時の痙攣を伴うあの悪寒が着実に襲う。これが、夢の中であれば、次には金縛りの法にあって、自由意志はすべて拘束される事態に相成る (《 》内は本編からの引用。以下同じ）。

こうした切迫した体験に比べたら、この小説に出没する《吸血鬼》は怖くない、私の心身に何らの「反応」を起こすわけでもないから。渋滞に巻き込まれたタクシーの中で、閉塞的な無聊をかこつ客と運転手が、なぜか取って付けたように始める怪奇問答は理屈めかして冗長である。しかも、迷信にれた、形のない伝統的な《幽霊》を早々に退散させた上で、《しかし吸血鬼というのは、肉体を軸にした価値転換だ》などと、舶来の張子の虎には当時流行りの唯物論的な根拠を与える。あげくに、《信念と実証は無関係です》と論点整理をしたのに、《「山があると思えば、山がある」》というやや生硬な独我論を、ほぼそのまま《崇高な信念》にすり替える。これでは、《幽霊はいるような気がする》という根源的な疑念はとても晴らせない。

《ドノヴァンの古い唄》を「霧のマウンテン」と推して歌詞を直訳してみると、「山が有る。だから山は無い。だから山が有る」と読める。「有るから無い、無いから有る」の禅風の超論理である。コインの「表と裏」のように、あるいは人間の「生と死」のように、およそ存在というものは「有と無との相対・相即関係」の陰翳において直観される。ところが、この村上作品では、「われ思う、故に山あり」のごとき単なる思い込みが、吸血鬼を信じるストレートな根拠になっている。やはり、「無」の深淵を覗かないことには、人間の存在は正当化できない。せっかく途中まで《僕》は、《「幽霊というのはつまり肉体的存在に対するアンチ・テーゼだな」》と《口からでまかせ》の絶妙な感性言語を弄しながらも、《肉体》の「有」に対する怨念に充ちた「対立的な無」を呈示しかけていたのに･･････。

この「対立的な無」が《幽霊》の正体ということになると、この脈絡は私にとっては恐ろしくも懐かしい。幼い頃にはまだ、生家の高い天井の、天窓の周縁の暗がりには得体の知れない魔物が潜み、母の実家がある奥地の森深くにはが棲んでいた。盆踊りの夜に、神社の境内まで行く闇夜の道のりの長かったこと。途中で懐中電灯が壊れなどしたら、目をつぶっても開けてもどうにもならない圧倒的な漆黒の闇に手荒く抱擁された。こうして、わが恐怖の属人的な「無」は、自ら「無限後退」を始め、かつ《一般化》を敢行して、いずれ「絶対的な無」のなかに開放される。１秒以内に（あるいは１秒もかかって）震えるわが「直接経験」は、知情意の内部感覚のいずれにも記憶に残る痕跡をとどめながら、「無」の階梯を限りなく降りくだる。

結局のところ、《本当の吸血鬼》とは、以上のような存在の深掘りがない限り、渋滞のタクシーの中に閉じ込められた《僕》の、この時だけの八つ当たり的な「妄想」としか考えられない。これが《吸血鬼》として結晶化する理由は大きく二つ。一つは、《禁煙の三日目》の禁断症状が閉塞状況の中で倍加した上で、何か奇怪なものに依存して出口を求める。二つめが、《メーターが上がる時のカシャカシャという音》と日常生活の諸々の鬱積との相乗が、運転手のみならず、タクシーという運送システムへはけ口を求めて、ひたすら《一般化》に向かう。ここで留意しなければならないのが、《一般化》の矛先が諸々の社会システムへの「責任転嫁」(ブレーム･シフト)と、個別次元の「個人攻撃」(パーソナル･アタック)に向かう場合である。いずれも、正当な批判精神とは異質の、いわば劣情の肥大化であることから、《「そういうややこしいものを認めると、もうキリがないからさ」》の台詞のとおり、「有から有へ」の平板な拡散は収まりがつかず、結局回り回っておのれのＤＮＡを傷つける。この小説に戒めがあるとしたら「一般化の作法」ではなかろうか。

言葉による現実へのアプローチ

村上　林造

はじめに―言葉と事実（現実）のはざまで

「タクシーに乗った吸血鬼」は次のように始まる。

　悪いことというのは往々にして重なるものである。

　これはもちろん一般論だ。しかしもし実際に幾つか悪いことが重なってしまえば、これはもう一般論なんかじゃない。待ちあわせていた女の子とはすれ違う、上着のボタンはとれてしまう、電車の中で会いたくもない知り合いに会ってしまう、虫歯が痛み始める、雨が降り始める、タクシーに乗れば交通事故で道路は渋滞という有様だ。そんな時にもし、悪いことは重なるもんだよ、なんて言う奴がいたら、僕はきっと殴り倒してしまうに違いない。

　一般論なんて結局はそういうものだ。

　ここで僕が語っているのは、一般論と現実的事実の落差である。「悪いことというのは往々にして重なるものである」という一般論を「語る」ことと、「実際に幾つか悪いことが重なってしま」うことは、いうまでもなく次元が異なる。一般論とは一般に正しいと認められている言説であり、その表明は言表主体にとって第三者的事実認知に過ぎないのに対し、事実としての「悪いこと」の当事者となることは、彼にとって不愉快な苦痛を味わわされる経験だからである。つまり、ここでの一般論と現実的事実の次元の違いとは、その人が問題の当事者であるか否かの違いである。一般論が「言葉」であるのに対し、事実は経験であり「言葉以前」であると言ってもよい。そのように見れば、一般論と現実的事実の関係とは、人が言葉によって言葉以前（現実）にどう触れ、生きるのという問題なのである。

人はあるモノゴト（存在・事物・状況）を言葉で表すことで、それを認知し伝達するが、言葉の働きがそれだけであれば、相手にその内容が伝達された時点で言葉の役割は終わる。しかし、彼がある言葉を語ったということ自体がそのまま一つの出来事であるという場合がある。そこでは、言葉が発せられたことによって一つの場（状況や局面）が立ち上がる[[1]](#footnote-1)。また、ある発話が発話主体の信念や立場の表明となり、その言葉がその後、彼の行動や生き方を規定していく場合もある[[2]](#footnote-2)。これらの場合、言葉は話し手や聞き手を対話の場に巻き込んでその出来事の当事者とし、彼の生き方や運命に影響を与えることになる。つまり、言表を通じて対話の場（人と人とが関わる場）が構成され、その中から人の認識や行動が生成されることになる。現実と発話（言葉）は深く関わり合っているのである。

「タクシーに乗った吸血鬼」は、最初一般論と現実的事実の落差を痛感していた僕が、タクシーの中で「吸血鬼」と出会う話である。小説の舞台（場）はタクシーという密室空間に限定され、そこでの出来事とは二人の言葉のやりとりだけである。しかし、僕はその中で「吸血鬼との出会い」という出来事の当事者となり、東京には現実に吸血鬼が運転するタクシーが走っていると思うに至る。それは一見極めて荒唐無稽な話に見えるが、実は出来事が生成する過程で言葉がどう機能するのか、言葉によって現実がどう生み出されていくのか、その一部始終が表現されているように思われるのである。

１、吸血鬼の存在に関する二つの問いかけ―一般論的問いと遂行的問い―

会話は、タクシーの運転手が突然僕に「吸血鬼って本当にいると思います？」と問いかけたことから始まった。それに対して僕が「キューケツキって、あの血を吸う……？」「吸血鬼的な存在とか、メタファーとしての吸血鬼とか、吸血コウモリとか、ＳＦヴァンパイアとか、そういうんじゃなくて本当の吸血鬼？」とことさら確認したのは、運転手の問いが言葉遊びや頓智クイズに見られるようなシニフィアンのレベルの問題ではなく、「本当の吸血鬼」の実在をめぐる問題であることの確認である。しかしそうであれば、この問いは「吸血鬼とは何か」、つまり「吸血鬼」という語のシニフィエに関わり、読者は「吸血鬼」という言葉の意味に直面させられることになる。

ここで僕が気楽に「わからないな」と答えたのは、それが一般論としての問いである限り、僕には所詮無関係な話にすぎないからである。運転手は納得せず、「わからないじゃこまるんですよ。信じるか信じないか、どちらかにして下さいよ」と問い詰めるが、僕は局外者的な立場を譲らない。僕は、吸血鬼の存在は「信じない」と答え、幽霊については信じると言う。「幽霊と吸血鬼の違い」については、「肉体的存在に対するアンチ・テーゼ」と「肉体を軸にした価値転換」というもっともらしい「口からでまかせ」でごまかし、「そういうややこしいものを認めると、もうキリがないからさ」と平然と切り捨てる。僕の傍観者的態度は際立っているのである。とはいえ、そもそも中世ヨーロッパの伝説に登場する「吸血鬼」が20世紀の日本に存在するなど、全く現実味のない話だから、僕が真面目にこの話題に関わらないのは当然であろう。それに対して、運転手の真剣な態度は、彼にとって「吸血鬼」が存在するかどうかが重要な問題であることを感じさせる。二人の態度の違いは、第三者と当事者という二人の立ち位置の違いに発していることが予感されるのである。

僕の態度を見た運転手は質問を切り替え、「本当に吸血鬼がいたらどうします？」と問うて、僕に態度決定を迫る。一般論においては、吸血鬼が「いる」と言おうが、「いない」と言おうが、言表主体に責任は生じないが、「吸血鬼はいる」というのが「信念」の表明であるなら、それに対して「どうするか」が問題になり、彼の生き方が問われるからである。しかし、僕はのんきに「参っちゃうだろうね」と答え、依然として傍観者的立場を手放さない。それに対し、彼が「信念というのはもっと崇高なもんです。山があると思えば山がある、山がないと思えば山はない」と言うのは、僕の傍観者的態度を戒めるのであろう。僕が運転手に、「で、あなたは吸血鬼の存在を信じてるの？」と反問すると、彼はきっぱり「信じてます」と答え、そこで僕が「どうして？」と聞き返すと、「どうしてって、信じてるからですよ」と、それが彼の「信念」であることを明確に示す。「実証できる？」という僕の追及に、彼が「信念と実証は無関係です」と答えるのは、吸血鬼が存在することは、彼には一般論ではなく、信念に基づく遂行的言明であることを示しているといえる。

しかし、「どうしてこんなところで吸血鬼の話をしなくちゃいけないのだ？　あるいはこの話には何かおちがあるのかもしれない」と考える僕は、やはりこれを単なる一般論のやり取りと考えている。ここまでのところ、傍観者的一般論の立場を手放さない僕と、当事者としての遂行的次元に立つ運転手の対照性が際立つのである。

２、「自分が吸血鬼であること」を「実証」できるか―言葉の意味とは何か―

　その直後、運転手が突然「でも実証できますよ」、「だって私が吸血鬼だから」と言ったことで、会話は急回転する。この運転手自身が「吸血鬼的な存在とか、メタファーとしての吸血鬼とか(略)、そういうんじゃなくて本当の吸血鬼」であるとすれば、僕は傍観者ではなく、まさに吸血鬼と出会っている当事者だからである。この運転手の一言で、会話は一般論の次元から、現実的な出来事に一瞬に切り替わり、タクシーの中の空気は一気に緊張感を帯びてくる。

しかしもちろん、運転手が「私が吸血鬼だ」と言ったことで、彼が「本当の吸血鬼」であると「実証」されたわけではない。むしろ、僕の内部では様々な疑問が駆け巡ったであろう。僕は三日ぶりに「煙草に火を点け、三日ぶりのニコチンを肺の中に送りこんだ」後、彼に質問し始める。僕が「本当に吸血鬼なの？」と聞くと、彼は「そうですよ。嘘ついたって仕方ないでしょう」と答え、「いつから吸血鬼なの？」という質問には、「あれはちょうどミュンヘン・オリンピックの年だったから」と答える。彼はどの質問にも確信をもってよどみなく答える。それは、彼の「信念」の確かさをうかがわせるが、だからといって彼が吸血鬼であることの「実証」にならないのはいうまでもない。

ここで僕は、「どうしてタクシーの運転手やってるの？」と質問する。彼がもし「本当の吸血鬼」であれば、なぜ現代日本でタクシーの運転手をしているのか、ここに彼が「本当の吸血鬼」であるかどうかに切り込むポイントがありそうだと思ったのであろう。それに対して運転手は次のように答える。

「いちばんの理由は吸血鬼という概念に捉われたくないからです。マントかぶったり、馬車に乗ったり、城に住んだりって、そんなの良くないですよ。そんなことをする意味がない。だいたいですね、今どきどこに城なんてものがあるんですか？　どこで馬車を手に入れればいいんですか？　私はちゃんと税金だって納めてるし、印鑑登録だってしてます。ディスコにだって行くし、パチンコもします。おかしいですか？」

　運転手は僕に「おかしいですか？」と訊くのだが、これがもし「メタファーとしての吸血鬼」についてであれば、彼が、税金を納め、印鑑登録をし、ディスコやパチンコに行っても全くおかしくはない。しかしここでの彼は、「吸血鬼的な存在とか、メタファーとしての吸血鬼とか」ではなく、「本当の吸血鬼」であると主張している[[3]](#footnote-3)。ここからは、「吸血鬼」という語の本当の（真正の）意味とは何か、どうすれば言葉の「本当の意味」を問えるのかが問題になって来る。だが、考えてみれば言葉とは代理表象なのであるから、言葉がモノ自体を直接に表現することはできない[[4]](#footnote-4)。言い換えれば言葉は本来メタファー的にしか機能しないのであって、「本当の吸血鬼」とは何かを問うても、その真正の意味（概念）を直接示すことで、その存在を「実証」するのは不可能なのである。そのように考えれば、運転手が「信念と実証は無関係です」と言って、自分の「信念」を主張したのは理にかなっているともいえる。

言葉で「本物の吸血鬼」であることの実証ができないとすれば、実際に彼が僕を襲って血を吸ったら、彼が「本物の吸血鬼である」ことが「実証」されるであろうか。ここで問題になるのは、「実際に彼が僕を襲って血を吸う」という（言葉以前の次元の）出来事は、それを言葉で表現しなければ（言葉以後の次元に転換しなければ）「実証」に踏み出せないということである。そこで、言葉以前の出来事が「彼が僕を襲って血を吸った」という形で言語化された時、「襲う」とか「吸う」という言葉の意味が問題にならざるを得ない。しかし、それを示すことができないのは、「本当の吸血鬼」の意味を示せないのと同じである。言葉では「本物の吸血鬼である」ことと「吸血鬼の真似をする」ことは明確に区別されるが、現実の出来事（言葉以前の次元）において、その両者を区別することは不可能なのである[[5]](#footnote-5)。

　しかしそれでは、それほどあいまいな言葉の意味によって、我々は実生活においてどのように意思疎通しているのか、またそこで言葉の意味はどのように機能しているのか。いうまでもなく、各言語の語彙体系は各国の自然風土や歴史的文化的特質を反映しており、言語共同体によって語の意味は大きく異なる。それは、各人の表象する言葉の意味が言語共同体によって大きく規定されているということである[[6]](#footnote-6)。その一方で、意味とは主体による私的な概念化の産物であり、一人一人の人生経験、言語体験によってその内容は大きく異なる[[7]](#footnote-7)。つまり、言葉の意味には公的側面と私的側面があり、「吸血鬼」の意味についても、我々は自己内面でそれを表象しており、他人の表象も恐らく大同小異だろうと思っているのだが、一人一人の表象するシニフィアンの具体的内容を知る方法は原理的にないのである。それにもかかわらず、シニフィエが同じであればシニフィアンもほぼ同じだろうという期待に基づいて、我々は、自分の表象する言葉の意味は他人にも共有され、相互理解が成り立っていると思っているのである[[8]](#footnote-8)。

タクシー運転手は、「でも実証できますよ」「だって私が吸血鬼だから」と言うのだが、これは「吸血鬼」であることの「実証」はそのような自己言及以外にはないということであり、僕が、「でもさ、なにかこう、ピンと来ないんだよな」と答えるのは当然といえる。運転手が「信念というのはもっと崇高なもんです。山があると思えば山はある」と言うのは、「吸血鬼」の存在を言葉の概念と論理によって実証することの不可能性から、存在の根拠を「信念」に求める態度ともいえる。ここから、「私は吸血鬼だ」という言表をめぐって、それを「実証」しようとするか、それとも言表主体の「信念」として認めるかを二択で問題にしても、それによって問題は解決するわけではないのである。ここで大切なのは、僕が、「本当の吸血鬼」との出会いという「言葉以前の出来事」の当事者として、その体験を自ら生きつつあるということであろう。その出来事を読む読者は、「言葉の次元」と「言葉以前の次元」が交錯する現場に立ち会わされる。そこでは、「言葉の意味」とは何か、「現実の出来事」とは何かは解き難い謎となり、「実証」も「信念」も自分を世界に結びつける力を失っていると感じられ、自分の意識の上に現れた「存在」の不確かさに戸惑わずにはいられなくなる。

３、見えない吸血鬼との出会い―対象が「見える」とはどういうことか―

ここで、運転手から「お客さん、信じてませんね？」と決めつけられた僕は、不思議な体験をする。

　僕は顔を上げてミラーの中の運転手の顔を見た。しかしミラーは妙に暗くて、彼の顔を見ることができなかった。僕は目をこらしてみたが、そこには顔の輪郭らしきものがぼんやりと浮かんでいるだけだった。おかしいな、と僕は思った。さっきまではちゃんと見えていたのにな。

　我々はこの場面をどう考えるべきであろうか。そもそも、人が「ものを見る」とは、あるいは人に「ものが見える」とはどういうことなのか。それは一つの出来事である以上、言葉以前の営みであり、言葉の意味と無関係な出来事とも思われるのだが、果たしてそうであろうか。「見る」ということが、人がある事物を対象化し、認識することであるとすれば、そこに既に意味作用が含まれているはずであろう。例えば我々はよく「ものごとをあるがままに見る」というが、一切のバイアスを受けないでモノを見ることは不可能である。なぜなら、我々は見えたものの中に意味を志向し、それを通してはじめてモノを対象化することができるからである。例えば、個別的には様々な姿形をした猫がいるが、我々は一瞬にそれを犬や鼠と区別して、猫と認識する（「分かる」）。また、子どもが多くの人の中から自分の母親をみつけたり、兵士が戦場で敵を識別するのも同様である。いずれの場合も、見えたモノの中に対象を見て取る経験を繰り返すことで、画像と意味が結合されるようになる。つまり、シニフィアンの中に同時に猫や母や敵という意味（シニフィエ）を見て取るということが、「見える」（「分かる」）ということなのである。人は、意味（シニフィエ）と無関係に色や線や形（シニフィアン）だけを見ているのではない。

そのことは例えば、白黒のレントゲン写真から医師が微小な病変を見て取ったり、天文学者が無数の星の中から新しい星を発見したりする場合を考えればわかりやすいかもしれない。同じモノ（色や形や線）を一般人が見ても、無意味な白黒模様や一面に散らばる光の粒が目に入るだけで個々の臓器や星を見分けることは難しいし、まして病変や新星を見てとることなど不可能であろう。つまり、自分の見方によって意味を発見できないものは、その色や形だけがどれだけはっきり目に入ったとしても、それは「分からない」＝「見えない」のである。この日、僕が出会った運転手は、一見したところふつうのタクシー運転手だったが、その本質（意味）は「吸血鬼」であるという。そして、対象の意味とは本来的に「見えない」ものである。タクシーのミラーの中で僕が出会ったのは、「見えない」ものとしての「吸血鬼」そのものだったのであろう。

とはいえ、我々はある人の前でその人の正体（意味）が分からないからといって、その顔が「見えない」という経験はしない。それは、経験的次元においては、直接的に「見えた」ものに基づいて我々は「分かったつもり（見えているつもり）」になるからである。先に挙げたレントゲン写真を見る医師や星空を見る天文学者の例でいえば、一般人はその中に病変や新星が見えなくても、それが自分には「見えていない」ということに気づかない[[9]](#footnote-9)。つまり、モノの本質としての「意味」は原理的に見えないものであるにもかかわらず、そこで猫、母親、敵等のシニフィアンを与えられることで、シニフィエ（意味）が見えた気にさせられる。それが言葉の機能なのである。我々は「吸血鬼」という言葉を与えられたらその意味を「分かったつもり」になるが、もし言葉以前の次元にある「本当の吸血鬼」の意味が前景化したら、その認知不可能性の前に立ちすくむしかない。僕が乗っているタクシーの車内とは言葉以前の世界であり、そこで僕が「ミラーの中」に見た「運転手の顔」とは言葉以前のソレである。読者もまた、この場面を読みながら、僕と同様、言葉以前のカオスに直面させられるのであり、それが小説を読むという体験なのである。

４、彼女に電話し、吸血鬼について注意喚起すること

―「吸血鬼の存在を信じる」とはどういうことか―

運転手の顔が見えなくなるという不可解な事態に直面して戸惑う僕に、運転手は「私が吸血鬼だって……信じてないでしょう？」と追い打ちをかける。確かに僕は、運転手が吸血鬼であるという確信を持てていないのだが、彼に強く迫られてあわてて「もちろん信じてるよ」と答え、「山があると思えば、山はある」という彼の言葉を繰り返す。言葉の流れから見れば、僕はここで運転手の主張を受け入れ、彼が吸血鬼であるという事実を認めただけでなく、自分の「信念」を通じて存在を生み出すという態度まで許容してみせたわけである。それを聞いた運転手が落ち着き払って、「じゃあ、いいんですけど」という余裕を見せたのは当然であろう。

しかし、僕が彼を吸血鬼であると認めたことで、その後の二人の会話は、運転手（＝吸血鬼）についての四方山話に移っていく。僕が「で、時々は血を吸うわけ？」と聞くと、彼は「そりゃまあ、吸血鬼ですから血は吸います」と答え、「血を吸うんならなんといっても女の子ですね。なんかこう、しっくりくるんですよ。そう、俺は吸血鬼をやっているという実感があるんですね。充実するんです」と言う。これからすれば、彼はやはり人の血を吸った経験があるのだろう。僕が「女優でいうとどんな感じが美味いのかな？」と聞くと、彼は「岸本加世子」と「真行寺君枝」の名を挙げ、「うまく吸えるといいね」と言う僕に、運転手が「いつか本当に吸えるといいんだけどな」と答えるところでタクシー内での二人の話は終わる。二人の会話は極めて和やかに、親和的雰囲気の中で進行するのである。改めて考えればそれは荒唐無稽としか言いようのない会話だが、運転手が「本当の吸血鬼」であるという前提に立ちさえすれてば、これはごく普通の世間話そのものといえる。この会話の中で、僕が本当に彼を吸血鬼と信じているのか、それとも表向き信じたふりをして話をあわせているだけなのかは分からないが、読者はその疑問を解決できないまま、この後小説は一気に結末に向かう。

僕は帰宅すると、「すれ違って会えなかった女の子に電話をかけた。話を聞いてみると、すれ違うにはすれ違うだけのちゃんとした理由があった。そういうものなのだ」と思う。一般論から言えば「悪いことというのは往々にして重なるもの」なのだが、実際の出来事に即してみれば、一般論ではカバーしきれないことが多く起こっているのであり、そういう出来事が互いにかかわり合った結果として、僕と彼女が「すれ違って会えなかった」という「悪いこと」の一つが生じたのであった。つまり、生きた現実世界とは傍観者的立場からする一般論では到底捉えきれない、常にダイナミックに変化し続ける多面的重層的な世界なのであり、その真相を一般論（言葉）で把握することは不可能であろう。そのような場所で、人はどのように振舞うのか。

　ここで僕は、彼女に向かって、「ねえ、ところで練馬ナンバーの黒塗りのタクシーには当分乗らない方がいいよ」と言う。その後の会話は次のように続く。

「どうして？」と彼女は訊ねた。

「吸血鬼の運転手がいるから」

「そう？」

「そう」

「心配してくれてるのね？」

「もちろん」

「練馬ナンバーの黒塗りね？　そこに吸血鬼の運転手が乗っているのね？」

「うん、しんじてくれないかもしれないけれど」と僕は言った。でもそれは本当なのだ。そのタクシーには運転手の恰好をした吸血鬼が乗っているのだ。そしてなんといっても、彼女はそれに注意しなくてはいけないのだ。この巨大な街ではどんなことだって起こりうるのだ。山があると思えば、そこに山はあるのだ。

　しばしの沈黙があった。それから「どうもありがとう」と彼女は言った。

「どういたしまして」

「おやすみなさい」

「おやすみ」

僕は彼女に「練馬ナンバーの黒塗り」のタクシーに「吸血鬼の運転手が乗っている」ことを告げ、注意を喚起をする。僕はそれを確かな事実と認め、「この巨大な街ではどんなことだって起こりうるのだ」と思い、「山があると思えば、そこに山はあるのだ」という運転手の言葉を自ら心の中で繰り返している。しかしまた、その話は彼女が信じるにはあまりに荒唐無稽であり、せいぜいジョークとしてしか彼女に受け取られないだろうことは、僕にも予期されたであろう。実際彼女は、僕の話の内容には関心を向けず、「心配してくれてるのね？」と返事する。それに対し、僕は「しんじてくれないかもしれないけれど」と言って、彼女の注意を話の内容に向けようとするが、「しばしの沈黙」の後、彼女は「どうもありがとう」とだけ言い、タクシーに「吸血鬼の運転手が乗っている」ことには最後まで触れようとしない。彼女は、僕の「ジョーク」は彼女への気遣いと好意を表すものだったのだろうと判断し、その意向を受け取った証として「どうもありがとう」と言ったのでだろう。それを聞いて、僕も、彼女が自分の注意をどう受取ったかを理解したはずだが、それ以上の注意喚起はせず、「どういたしまして」と答え、「おやすみなさい」「おやすみ」という二人の挨拶で小説は閉じられる。

僕自身の内心の思いからすれば、僕が「そのタクシーには運転手の恰好をした吸血鬼が乗っている」ことを「それは本当なのだ」と思い、「彼女はそれに注意しなくてはいけない」とその危険性を確信しているのは間違いない。だがそうであれば、僕はなぜこの話が単なるジョークでない事を説明して、その事実性と危険性を彼女に強調しないのだろうか。それは、僕がこの運転手が吸血鬼であることを「本当は信じていなかった」からであろうか。しかし、僕の内心の思いからすれば、確かに僕は「信じていた」。僕は、運転手を本当に吸血鬼と信じているのか、それとも表向き信じるふりをしただけなのか。この二択問題が難問に見えるのは、それが言葉の次元における論理だからである。

この小説を読む中で、読者は、「本物の吸血鬼である」ことと「吸血鬼の真似をしている」ことの区別をつけることの原理的な不可能性に直面させられてきた。ちょっと振り返ってみても、我々は実生活において何かを「信じる」態度をとっている時に、「本当に信じている」ことと「信じるふりをしている」ことがどこまで明確に区別され得るであろうか。言葉以前の次元において、この区別は意味を持たないのであり、我々はそれを当然のことと受け容れながら毎日を生きているのである。

言葉の次元においてみればこの上なく明確に区別され、むしろ両極端として対立すると見える二つの契機が、言葉以前の経験や出来事の次元では分別不可能なまでに曖昧であるのは当然である。そのようなカオスの中で生きているにもかかわらず、それを言葉で表現することにより、我々はあたかも明確に分節され、確実な意味をもった世界を生きているように感じている。この小説を読む中で、読者は、そのような人間のありようをリアルに体験させられるのである。

おわりに

「タクシーに乗った吸血鬼」は、最初吸血鬼の存在を信じていなかった僕が、運転手との会話の中で吸血鬼の存在とその危険性を信じるようになるという話である。言葉によって整理すれば、この小説の初めと終わりで僕の認識は正反対に変化したことになる。しかし、そう思えるのは、それが言葉で説明されたからであって、僕自身にそれが果して「変化」として意識されたかどうかも確かではない。二人の会話の中で、運転手が「本物の吸血鬼である」ことが「実証」されたわけではないし、僕が運転手の「信念」を積極的に受け入れたわけでもない。僕は半信半疑のままに運転手との話を続けていたのだが、そのプロセスは同時に、僕が「練馬ナンバーの黒塗り」のタクシーで「吸血鬼の運転手」に出会ったという「確かな出来事」であり、その中で僕は「この巨大な街ではどんなことだって起こりうるのだ。山があると思えば、そこに山はあるのだ」とさえ思われるに至る。しかし、そのような「確信」を、僕が「本当に信じている」のか、それとも単に「信じていると思い込んでいる」だけなのかは実は弁別不能なのである。読者は、その様な一部始終に没入することで、自分自身が意識し、理解し、確信している世界の根拠が実に薄弱であることを改めて突き付けられる。それと同時に、自分が直接体験している世界とは次元の異なる世界の存在に触れさせられることになる。

読者をそのような体験に連れ込んでいく上で、タクシーの中で語り手が「本物の吸血鬼に出会う」という荒唐無稽な出来事が極めて効果的に機能していることはいうまでもないだろう。そのような奇抜な着想の中に、村上春樹という作家が小説の言語機能についてもっている極めて鋭い感覚が感じられるとともに、彼がその作家的出発期において、そういう感覚を早くもストレートに展開して見せていることに驚かされる。そのような意味で、「四月のある晴れた朝に100㌫の女の子に出会うことについて」や「カンガルー日和」とともに本作「タクシーに乗った吸血鬼」は見過ごすことのできない作品であるといえるし、同時に、それらの諸作を収める初期短編集『カンガルー日和』は、村上春樹という作家の創作力の根源を探る上で極めて意味を持つ作品集であるといえるのではないだろうか。

「信念」を揺るがす〈出来事〉に出会うこと

― カルチュラル・スタディーズ、新歴史主義の視座から―

桑原　理恵

※ 「タクシーに乗った吸血鬼」の初出は『トレフル』1981年12号。

『トレフル』はかつて伊勢丹デパートが主催していた月刊サークル誌。『１９７３年のピンボール』（1980年6月）執筆後の1981年４月から1983年３月の24ヶ月間、原稿用紙10枚程度の18作品を執筆（うち「図書館奇譚」のみ連続で計６ヶ月分）。

『村上春樹全作品 1979〜1989』第5巻（1991年1月、講談社）に収録時、大幅に加筆修正された。

１、はじめに ―「時よ止まれ。君は美しい」



「吸血鬼」の話らしく、血をめぐる言説から始めよう。

“Blut ist ein ganz besondrer Saft.”

直訳「血液は非常に特別なジュースです」（ゲーテ『ファウスト』）

「吸血鬼」を自称するタクシーの運転手は、ミュンヘン・オリンピックの年（1972）から「吸血鬼」になったと「僕」に語る。「時よ止まれ、君は美しい」は、翌1973年世界でロードショー公開されたミュンヘン・オリンピック公式ドキュメンタリー映画「時よとまれ 君は美しい ミュンヘンの17日」を指すと考えられるが、典拠は『ファウスト』第二部第5幕、ファウストが悪魔と契約を交わすシーンである。

Werd ich zum Augenblicke dürft ich sagen:

Verweile doch, du bist so schön!

直訳：私はそうした瞬間に向かってならこう呼びかけてもいいだろう。

とどまれ、お前はいかにも美しいと。

人間の知の限界に絶望した老ファウストが虚無感から自害しようとした瞬間に現れた黒いむく犬、悪魔メフェストフェレス。ファウストが人生を一から始めるための若返り薬の見返りに、メフィストは魂の取引を提案する。ファウストはもし人生の最上の瞬間に「時よ止まれ、君は美しい！」と口にしてしまったなら、その時メフィストに魂をくれてやろうと約束する。以下に森鷗外訳で引用する。

ファウスト

「を甘いでして／己にの心を起させ、／己をですことが君に出来たら、／それが己の最終の日だ。／賭をしよう。」

メフィストフェレス

「ただちょいと血を一滴出して署名して下さい。血という奴は兎に角特別な汁ですからね。」

ファウスト

「あらゆる知識が嘔吐を催しそうになった。／どうぞ官能世界の深みに沈めて、／燃える情欲のを

してくれ給え。（ゲーテ『ファウスト』岩波文庫・森鷗外訳）

　ファウストにとって、悪魔との出会いは〈出来事〉、〈出来事〉とは「信念」の破れ、ドゥルーズのいう「ひび割れ」（『差異と反復』）によって〈私なるもの〉が壊れる契機である。

血を吸うこと、とくに「女の子」の血を、メタファーとしての「美味い血」（＝生命エネルギー）を吸う「吸血鬼」ならば、町娘グレートフェンを誑かしたファウストも、「女の子の洋服を脱がせる順序を考えていた」「僕」も等しく男性一般が該当するかもしれず、こうした「メタファーとしての吸血鬼」は、「本当の吸血鬼」の「実在」とは異なる問題である。また「メタファーとしての吸血鬼」は、欧米の植民地支配とその後の地球を覆い尽くすグローバリズム、貨幣を介した生命の収奪システムの別名でもある。

この地球表面・地球内部の事実として、「本当の吸血鬼」が「実在」するとすればどうだろう。無論ルーマニアの城に住むドラキュラ伯爵以外に、である（ドラキュラはルーマニア語で「竜の息子」を意味し竜は悪魔の意）。しかしそれは、人々の「信念」体系によって、深く隠されてきた。とは「彼ら」＝「ビッグブラザー」（ジョージ・オーウェル『１９８４』、村上春樹『１Q８４』）のためのhis storyである。2010年代に浮上した「ポスト・トゥルース」の正体は「真理省」（『1984』）のチェックにパスした「真理」、すなわち（DS）にそぐう計略をめぐらせた「真実」を（sheep+people）に供与する「真理省」の検閲を経た「真理」である。こうして「」ＤＳの意図に沿う教育とメディア支配によって「信念」は人々に植えつけられてきた。〈近代〉なるものの正体は、が国民になした、こうした洗脳である。それに気づき声を上げる人びとを「彼ら」は陰謀論者と呼び習わす。「吸血鬼」=悪魔（「彼ら」）の言説「信念というのはもっと崇高なもんです」とは、真っ当な崇高さや信念を指してはいまい。運転手の吸う「ハッカの煙草」のもっともポピュラーな銘柄はセーラム (SALEM)、米国開拓時代の魔女裁判の地と同名の悪魔繋がりと気づきたい。

悪魔の最大の特徴は嘘つきである。「信念」とは、「彼ら」が大衆sheepleに「崇高」なものと受け入れさせる計略として仕組んだ「真実」を「信念」として植えつけたい意図を読むべきだろう。

　「吸血鬼」とミュンヘン・オリンピックを繋ぐ鍵は、人間の魂と生命を賭けた邪悪なものとの血の契約である。悪魔との契約には血が不可欠なのだ。村上春樹諸テクストには、本テクスト（1981）の書かれたデタッチメントの時代にも慎重なメタファーとして埋め込まれ、韜晦しつづけてきたものがある。1995年のオウム真理教事件と阪神淡路大震災以後（『アンダーグラウンド』『神の子供たちはみな踊る』から）はコミットメントに転じ、『１Q８４』（2009～2010）で顕著に描かれた邪悪なるもの。「彼ら」=「吸血鬼」の「実在」が、依然としてきわめて慎重にではあるが、次第に示されるようになった。いうまでもなく『１Q８４』は、ジョージ・オーウェルのディストピア小説『1984』を土台に持ち、ふるさと神戸の震災(人工地震)とオウム事件を執筆動機としている。

本テクストと同様、『１Q８４』の冒頭も、交通事故で渋滞するタクシー車内である点などが酷似している。視点人物青豆雅美と運転手とのやり取りから始まる『１Q８４』では、１９８４年のパラレルワールド「１Q８４」へ移る時空の歪み（青豆にとっての〈出来事〉）が渋滞中のタクシー車内で流れたヤナーチェク「シンフォニエッタ」をマーカーとして現れる。

村上テクストにおいて、あるいは現代史の一般論としても、1972年と1973年の間には決定的な断絶が存在する。日本現代文学史においても左翼の終焉、「左翼」が「サヨク」（島田雅彦『優しいサヨクのための喜遊曲』）となった時（磯田光一『左翼がサヨクになるとき―ある時代の精神史』1986）である。

ミュンヘン・オリンピック事件はオリンピック開催中のミュンヘンでパレスチナ武装組織「黒い九月」（）の起こしたテロ事件で、人質となったイスラエルのアスリート11名（警官１名、犯人５名）が殺害された。「黒い九月」占拠部隊はイスラエル収監中のパレスチナ人の他、日本赤軍の岡本公三やドイツ国内で収監中のドイツ赤軍幹部など234名の解放を要求、TV生中継で一部始終が全世界に実況放送された。それに先立つ日本のあさま山荘事件（1972年２月）に酷似した、こうしたメディアへの露出は、残忍性・暴力性でお茶の間を震撼させ釘付けにした。以後、若者たちの「正義」の人気は地に落ち、日本連合赤軍は解体に向かったと同様、学生運動としての世界的な左翼運動の正義の御旗が凋落する節目となった。1973年1月パリ協定によりベトナムの米軍はすべて撤退、小田実や鶴見俊輔ら「ベ平連」に集った文化人たちの叫ぶリベラルな正義も終了した。

そしてニクソンショック（基軸通貨の不換紙幣のオイルダラーへの切り替え）が現在に至る国際金融資本支配（オイル支配のロックフェラー＋紙幣支配のロスチャイルドの合わせ技での米ドル基軸通貨体制、実質的に昨今ロシアvsウクライナで話題のSWIFT）の独走態勢を整えた。ロックフェラーが現代医学と製薬業界を支配し病気を作り出し、医療と投薬、医療保険をセットで用意するマッチポンプ式で人の命と健康で金儲けできる仕組みも整えたし、遺伝子組替え作物（真っ先に小麦に着手しグルテンで免疫系を徐々に攻撃）、食品添加物、農薬、水道水に塩素やフッ素を添加して大衆（「彼ら」は「シープル」と呼ぶ）に微量に絶えず毒を盛り、ケムトレイルで有害物質を空から散布して、生かさず殺さず各国政府を小番頭に仕立てあげてグローバリズムを推進してきた。わが日本に対してＴＴＰはその総仕上げでモンサント社のＦ１種子と農薬をセットで買わせるための種子法廃止まで要求され、もともと30数パーセントでしかなかった我が国の食料自給さえ完全に奪われた。小泉・竹中構造改革によって、もともと形骸化し正規社員の利権を維持するだけだった労組は、非正規社員を守りもせず、パソナなどの派遣労働へと切り捨てられていった（人材派遣会社パソナの会長は竹中平蔵である）。

そして世界の富の半分以上を１パーセントの富裕層が独占するといういまの状況に至り、「GAFA」（米国のIT（情報技術）企業大手4社）は地球のIＣTをほぼ掌握、「彼ら」の目論んできたグローバリズムの完成も間近である。「彼ら」は「グレートリセット」（金融支配の完成）、（世界統一政府）を掲げている（世界経済フォーラム、ダボス会議等で「彼ら」は集う）。ジョージ・オーウェルが警告した見えない支配者「ビッグブラザー」（）の「人間牧場」（シープルと化した隷属人間）の支配は完成しつつある。一私企業が国家より絶大な力をもつ事態を今回のコロナ騒動（製薬会社が国家より上位にくる）で私たちは見せつけられている（コロナ騒動の本丸はシープルにワクチン接種させ、ｍＲＮＡで遺伝子を組み換え血を汚すこと、管理しやすいよう人口削減を行うこと、酸化グラフェンと５Gの合わせ技で電脳化支配することである）。

２、若者の「正しさ」に対する情熱と憧れはどうなったか

かつて純粋な若者たちの心に燃えていた社会的な「正しさ」に対する情熱と憧れは、その後どうなったか。加藤典洋は、村上のデビュー作『風の歌を聴け』(1979)をこう評した。

「『気分が良くて何が悪い？』という、まったく新たな肯定の感情が現れてくる（略）この小説は、これまで日本の戦後の文学を導いてきた、「金持ちなんて・みんな・糞くらえさ。」の声に、そうではない、まったく異質な感情が取って代わるさまを描いた、ある意味で、日本の精神史上画期的な意味をもつ小説なのである」。（加藤典洋『村上春樹イエローページ①』）

しかし次作『１９７３年のピンボール』（1980）で、村上は1972年から1973年の転換点へと立ち戻った。こうした情勢下での若者の正義の終焉と空虚、そして新しい内的モラルの発見を確認する物語である。視点人物の「僕」はカントの『純粋理性批判』を何度も読み返し、その一節「哲学の義務は、誤解によって生じた幻想を除去することにある。」が引用される。「僕」がカントを読む行為は原点に立ち戻ったうえで「内的モラルの構図を適切に書き換える」（竹田青嗣）ための誠実な葛藤の姿である。

カントの道徳哲学は、近代の人間が青年期にぶつかる「正しさ」への強い情熱とロマンをその核にしている。それはいわば「超自我」が若者に与える自己ロマンの論理である。（略）当時彼の心にふつふつと燃えていたであろうそのロマンの「最初の火」（見田宗介）を感じ取れる（略）われわれが若いころマルクス主義思想の凛とした正義の火に打たれた、あの厳粛な感じがありありと喚起される（略）しかし、このような青年の純粋な「正しさ」のロマンは、現実生活のどこかで必ず決定的な困難にぶつかる。このとき、ひとことで言って「現実と内的真実」というモラルの対立図式は書き換えられねばならなくなる。だが、それは決して簡単なことではない。わたしは同世代の多くの人間が、このはじめの内的モラルの構図を適切に書き換えることができずに苦しんでいるのを知っている。（武田青嗣「最も危機的な近代人のモラルの問題」、加藤典洋『村上春樹イエローページ①』解説）

そして「左翼」や若者の正義の終焉とともに「吸血鬼」は大手を振って跋扈し始めた。ごく下っ端ながらも「タクシーに乗った吸血鬼」の運転手も「吸血鬼」になった。日本では、この時期以降、児童誘拐が次第に報道から隠される推移と重なっており、児童相談所の闇の問題の発端である。貧者の売血だった輸血用血液が赤十字による献血運動となり隆盛したことも指摘できる。秘密裡に製造販売される極めて高価な血液製剤アドレノクロム（富裕層が常用する若返りの秘薬。日本ではTDLと富士フィルムを繋ぐ闇、昨年７月に富士山麓の地下工場を全焼）の闇と繋がる巨悪である。高価な化粧品類への胎盤使用や臍帯血など血をめぐるビジネスは闇が深い（一例として挙げるが、被害者川田龍平氏を有名にした緑十字の薬害エイズ事件の被告安部英医師は冤罪である。司法もメディアDSに完全支配されている）。

『１Q８４』の「ビッグブラザー」（世界政府）、NOWの完成を目指す「彼ら」=「吸血鬼」は地球の経済をめぐる血液、すなわち金融を支配し、人類のいのちを吸い尽くす。

**「私に一国の通貨の発行権と管理権を与えよ。そうすれば、誰が法律を作ろうと、そんなことはどうでも良い。」（マイヤー・アムシェル・ロスチャイルド、1773）**

世界経済はロスチャイルド家に代表されるユダヤ財閥から成る国際金融資本勢力（グローバリスト）によって牛耳られている。陰謀論では常識と呼べる話だが、現実にほとんどの国の中央銀行がロスチャイルド家の配下にあることは紛れもない事実である。

株式会社日本銀行の株は55％が日本政府、45％が民間の所有である。この民間からの出資分のほとんどを担う存在がロスチャイルド家である。明治維新の本質とは、幕府と薩長の両陣営それぞれにロスチャが金を貸し、ロスチャの武器商人からそれぞれ武器や戦艦を買わせて両者を戦わせ、実質的な英領として金融支配することであった。明治政府は日露戦争の戦費もロスチャから１００年の借款で賄った、日本はつい近年まで国民の血税で返済を続けていたのである。

３、「信念」が破れること＝〈出来事〉に出会うこと

「いま・ここ」には、すべてのが存在するが、人は自分の与える波動に共鳴する現実だけを受け取る。これはラジオの周波数を特定のチャンネルにチューニングすると同じ原理で、多数の現実＝並行世界はつねに存在しているが、体験するのはその時のその人の波動に合っている世界だけである。そして波動に一致した状況を人生に引き寄せることとなる。「悪いことというのは往々にして重なるものである」。「僕」の波動に一致した状況として「待ち合わせていた女の子とはすれ違う」し「上着のボタンはとれ」、「電車の中で会いたくもない知り合いに会ってしま」い、「虫歯は痛み始め」、「雨が降り始」め、「タクシーに乗れば交通事故で道路は渋滞」という出来事が映し出された。それというのも「僕」は「禁煙の三日め」で「何か楽しいことを考えようとしたって、何ひとつ思いつけない」状況、つまり「イライラし」て低く荒い波動を発信していたからである。「僕」も、絶望で自殺を決意した老ファウストも、低い波動を発していたおかげで「吸血鬼」や悪魔に邂逅するという〈出来事〉あるいは「ひび割れ」によって〈私なるもの〉が破られ、「信念」から救済される契機となる。

その人の物理的な現実は鏡である。その人が現実と強く思っているもの、すなわち波動の合っているものがその人の現実を作っている。鏡はその人の信念を映し出す。鏡に仕掛けがあるわけではない、物理的な現実が鏡である。これが現実、リアリティである。「実証」は「信念」が現実化したもの以外に対応することはできない。その人の信念体系に存在しないものは、目で見ることはできない。物理的現実には存在しないからである。

　「彼ら」は人間を支配するために波動（その土台となる負の感情）を用いている。恐怖や不安、無価値感、罪悪感などを持たせることで私たちの波動を低く保たせ、エネルギーを収奪してきた。「彼ら」とは地球の支配者、とか、さらに背後にいる邪悪な存在（ドラコ・レプティリアン等と呼ばれる爬虫類人の地球外種族、彼らは比喩でなく人間の血を吸い、肉を食する）、すなわち「吸血鬼」たちである。こうした話は陰謀論と揶揄されてきたが、早晩事実として明かされると報告者は確信しており、村上春樹を読み解くには不可欠な認識である。

コロナとはウイルスでなく政治である。コロナ・プランデミックの正体は「彼ら」（「ビッグブラザー」）によるNOWの完成を目指す政治である。先月辺りからはウイルスでなく蛇の毒であると暴露され、マスクが単なる奴隷化のシンボルだったことが明白となった。2020年春に全日本国民に配布されたアベノマスクは国民を守るためなどでなく、コロナをウイルスと思い込ませる政策であり、中抜きを利用した金儲け＝政治であった。コロナワクチンとPCR綿棒の先に酸化グラフェンを仕込み、５Gの電磁波との合わせ技で電脳化した人間奴隷を製造する計画に、さらなる邪悪さが暴露された。蛇DNAを忍ばせ人DNAを書き換えるテプティリアン爬虫類人化計画。創造主の子に手を加えた蛇の仕業と同手口である。何千年にわたって戦争、人間との闘い、と。ロシア対ウクライナが地球での「吸血鬼」との最終戦争であってほしいと願う。

当初プーチンは米国、西ヨーロッパ、イスラエルが資金提供する生物兵器研究所を消滅させることが目的だった。しかし、ロシアの特殊部隊（スペツナ）がウクライナ中央部で小児性愛者の野営地に偶然出くわし、そのような施設がウクライナに何百と点在していることを知る。プーチンは小児性愛者をすべて粉砕し、はびこる地獄のような児童売買組織をすべて壊滅させるという新たな大義を掲げた。これは、まったくトランプが米国で行ったことと同じである。トランプとプーチンは確実につながっている。以下は慧眼の士のグログからの引用である。

　プーチンはウクライナにおける特別軍事作戦において、幼い子供を世界的に売買する東欧の拠点を叩いたとトランプに告げたとの報道がマー・ア・ㇻゴ関係者（筆者註；トランプ陣営）からあったと言います。35000人の子供を救い出したとトランプに伝えたようです。

その後、トランプは、プーチンを嫌わない人は本当の意味で頭の良い人だ、、、と語りました。メディアに洗脳されずに、自分で考える力と真実を見抜く力がある人だとの賞賛です。

 ウクライナには生物兵器研究所があったことは確かで、メディアでは嘘のように宣伝していますが、中枢にいたヌーランド自身がイエスと言っているので確実です。

 こうした人類に対する非道な状況がウクライナやベイルートにありました。ベイルートは証拠隠滅で爆破されたようにも思えますが、例の大爆発事故の原因も詳細にはまだ発表されていないと思います。通り一遍の解釈はありますが、幼い子供の売買の重要中継地点であったことも原因していると私は思っています。

メディアはそうした悲惨な出来事が地上で起きていることを一切伝えません。現実は想像以上にひどいと思います。現代が一番奴隷の人数が多いという現実をなぜか隠したがります。

これまでの時代は、英米を中心にしたリーダーシップによって運営されてきました。しかし彼らは金融の失敗などで徐々に力を失い、その座から降りることを決定しました。それはイギリス前首相がはっきり述べていますので間違いありません。しかし各国政府との間に入って力を発揮してきた勢力があります。一般的にはＤＳと呼ばれることが多いですが、彼らはそれを黙ってみてはいません。せっかく各国政府に入り込んで甘い汁を吸い続けていられたのに、英米が中心となる国家システムに変更が来ることが許せないし認めるわけにはいかないわけです。

そして、反乱が始まりました。その戦いがウクライナであり、今後日本でも行われる可能性が高くあります。ＤＳが深く入り込んだ国では、彼らが黙っていないためです。メディアも当然そちら側ですので、重要なことでは真実を語れません。（以下略、マドモアゼル・愛「水瓶座の時代」ブログ）

４、おわりに ―「彼ら」が「僕」に裏返るとき

『村上春樹全作品 1979〜1989』（1991）収録時に大幅に加筆修正されたのは、鏡をめぐる以下の引用箇所である。

彼はバック・ミラーの中のぼくの顔を見た。（略）

「お客さん、信じてませんね？」

「ん？」

僕は顔を上げてミラーの中の運転手の顔を見た。しかしミラーは妙に暗くて、彼の顔を見ることができなかった。僕は目を凝らしてみたが、そこには顔の輪郭らしきものがぼんやりと浮かんでいるだけだった。おかしいな、と僕は思った。さっきまではちゃんと見えていたのにな。

　ミラーに映った「顔の輪郭らしきもの」はなにか？　それは、まちがいなく「僕の顔」である。「吸血鬼」とは「僕」、あるいは「吸血鬼」と「僕」は一つのものだったと気づき始める。魂の微細な震えのはじまる瞬間といったものを捉えたい。

本テクストと同じ『カンガルー日和』(講談社文庫)に収録された同時代の短編「鏡」に答えを求めたいとおもう。両作品は『村上春樹全作品 1979〜1989』への収録時にまとめて加筆修正されたもので、本テクストの「ミラー」の部分の加筆と多分に呼応すると考えるからである。「鏡」のテクストには、もっと明確に語られている。

　　そこには僕がいた。つまり―鏡さ、なんてことはない、そこに僕の姿がうつっていただけなんだ。昨日まではそこに鏡なんてなかったのに、（略）

煙草を三回くらい吹かしたあとで、急に奇妙なことに気づいた。つまり、鏡の中の僕は僕じゃないんだ。いや、外見はすっかり僕なんだよ。それは間違いないんだ。でも、それは絶対に僕じゃないんだ。僕にはそれが本能的にわかったんだ。いや、違うな、正確に言えばそれはもちろん僕なんだ。でもそれは僕以外の僕なんだ。それは僕がそうあるべきではない形での僕なんだ。

　うまく言えないよ。

　　でもその時ただひとつ僕に理解できたことは、相手が心の底から僕を憎んでいるってことだった。まるで暗い氷山のような憎しみだった。誰にも癒すことのできない憎しみだった。僕にはそれだけを理解することができた。（略）

　　やがて奴の方の手が動き出した。右手の指先がゆっくりと顎に触れ、それから少しずつ、まるで虫みたいに顔を這いあがっていた。気がつくと僕も同じことをしていた。まるで僕の方が鏡の中の像であるみたいにさ。つまり奴の方が僕を支配しようとしていたんだね。（略）

鏡なんてはじめからなかった。僕が見たのは、ただの僕自身だった。ただ、あの夜の恐怖は忘れることができない。人間にとって、自分自身以上に怖いものがこの世にあるだろうか。いつもそう思う。

　　　「鏡」：初出『トレフル』1983年2月号

　　　　『村上春樹全作品 1979〜1989』第5巻（1991年1月、講談社）に収録時、加筆修正。

デタッチメントを決めこみ「気分が良くて何が悪い？」という自己肯定の欺瞞を自己の内奥では暴き、憎み抜き、まぎれもなく「僕」自身の内部から刺し貫かれる「暗い氷山のような憎しみ」、「誰にも癒すことのできない憎しみ」をもう隠しきれない。ここから、コミットメントの時代に移行するまでの村上の重すぎる葛藤を読者は受け止められるのだろうか？

　「鏡」は高等学校の教科書に掲載されてもいる村上テクストである。親友（幽霊と思われる相棒「鼠」として初期作品に登場）と恋人を自殺させ、それでも自分は生きると決めた。生きるために変わることを決意した結論としてのデタッチメントの生き方（＝エクリチュール）が、自己否定として差し返される村上の苦悩を越えるには、郷里の被災とオウム事件という契機が、村上にはどうしても必要だったと理解したい。

1. そういう言葉の例として俵万智の短歌をいくつか挙げる。「『寒いね』と話しかければ『寒いね』と答える人のいるあたたかさ」「なんでもない会話なんでもない笑顔なんでもないからふるさとが好き」「今日なにがあったか君に告げながら話していることいちばんのこと」 [↑](#footnote-ref-1)
2. 例えば「私は教師だ」という言葉が、単なる事実の認知に過ぎない場合と、発話主体による教師としての信念の表明の場合がある。後者の場合、この発話は彼の行動に直結するはずである。 [↑](#footnote-ref-2)
3. 例えば「サムライジャパン」の選手は、言葉としては「侍」を称しながら、現代日本人として生活している。それは、「サムライ」という語が単なるメタファー（隠喩）だからである。ここで僕が直面したのは、彼等が「自分は『本物の』侍だ。それを実証できる」と言いだすという話である。「本物の」という副詞がついている言葉の意味を「実証」することが可能とは思われない。 [↑](#footnote-ref-3)
4. F・ソシュールによれば、シニフィエ（記号内容）はシニフィアン（記号表現）を通して初めて表現されるが、両者の関係は恣意的である。言葉の意味は実体として存在するのではなく、言語システム内部の隣接項との差異から生まれる。シニフィエ（意味、概念）を独立で取り出すことはできないのである。 [↑](#footnote-ref-4)
5. 現実社会において「出来事」を巡るやり取り（紛争や戦争の調停、事件の審理や裁判、歴史的解明等）で、出来事をどう言語化するかが重要な意味を持つのは、出来事自体が言葉以前だからである。「語る」とは「騙る」ことであるというのは、この事情を表すものであり、「徒然草」85段に「狂人の真似とて大路を走らば、すなわち狂人なり。悪人の真似とて人を殺さば、悪人なり」とあるのは、狂人（悪人）の真似と本当の狂人（悪人）の区別が原理的に不可能であることを述べたものである。 [↑](#footnote-ref-5)
6. この問題は、金田一春彦『日本語（上下）』鈴木孝夫『ことばと文化』『日本語と外国語』（全て岩波新書）等に詳しい。 [↑](#footnote-ref-6)
7. 鈴木孝夫は、ことばの『意味』は、「私たちがある音声形態（具体的に言うならば『犬』ということばの『イヌ』という音）との関連で持っている体験および知識の総体が、そのことばの『意味』と呼ばれるものである」と述べた上で、「（一）ことばの『意味』は、個人個人によって、非常に違っている。（二）ことばの『意味』は、ことばによって伝達することはできない」と述べている。（『ことばと文化』岩波新書92頁） [↑](#footnote-ref-7)
8. 数学をはじめとする科学の領域では、概念や記号を厳密に同じ意味で用いることが前提されているのに対し、日常的な言葉の意味は人によって意味が異なることを避け得ない。 [↑](#footnote-ref-8)
9. 我々がものを「見る」時、その対象の中にある意味を見出すのだが、その意味は自分の狭い体験と浅い知識の総体によって制限された、極めて一面的なものにすぎない。だが、我々はそれによって「分かったつもり」になる。 [↑](#footnote-ref-9)